

國學院大學学術情報リポジトリ

神奈川県高座郡寒川町方言の老年層のアクセント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000947

神奈川県高座郡寒川町方言の老年層のアクセント

坂本 薫

キーワード：アクセント、西関東方言、神奈川県方言、高座＝戸塚方言、老年層のアクセント体系

1. はじめに

神奈川県方言の音声、アクセントは、東京のアクセントとよく似ており、全県で差異が乏しいと言われてきた（日野資純1952）。そのため、文法や語彙とくらべると詳細な調査、研究があまり多くなく、県内方言の実態は明らかになっていない部分があり、研究の余地が残されている。本稿では高座郡寒川町で生育した男性の老年層話者2名を対象にしたアクセントの調査の結果とその特徴について述べる。概要を以下に示す。

（ア）名詞は、2拍Ⅱ類「北」の尾高型や、3拍Ⅲ類の「小麦」、Ⅳ類の「油」、「柱」、「涙」…の語の中高型など、金田一春彦（1942）や平山輝男（1968）などで関東地方西部のアクセントの方言的特徴として指摘のあるアクセントが観察された。その一方で、1拍Ⅰ類「帆」の頭高型や、2拍Ⅲ類の「神」、「雲」の頭高型、3拍Ⅳ類の「畑」、「林」、「東」の平板型のアクセントなど、現代共通語的なアクセントも観察された。

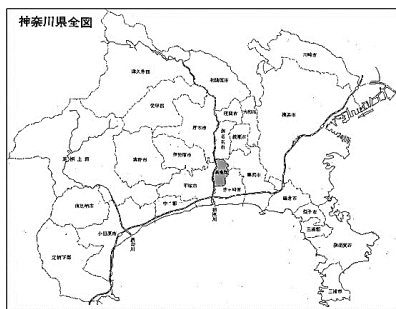
（イ）動詞は、3拍Ⅲ類の「入る：へール」の終止形および活用形のアクセントの一部に、平板型動詞と共通するアクセントが観察された。なお、西関東方言に属する他県の地点でも報告がある。また、特にⅠ類（平板型）の動詞の活用形に、方言的特徴が観察された。

（ウ）形容詞は、「ケレバ」が後続した形式に、後続形式の下がり目が保たれる伝統的なアクセントが観察されたが、終止形単独では起伏型への統合

が進行しており、同時にⅠ類の形容詞の活用形のアクセントにも起伏型と同じアクセントが観察されている。また、Ⅱ類の形容詞では、シロクナイ・シロクナルのように「ナイ」、「ナル」、「テ」などの形式に、頭高型と中一高型の両様のアクセント型が観察された。

2. 調査地点について⁽¹⁾

高座郡寒川町は、県中央内陸部に位置する人口4万8千人（2017年10月）の町で、茅ヶ崎市、藤沢市、海老名市、厚木市、平塚市の5市に隣接している。町の西側には相模川が流れ、町域の大部分は平野が広がっている。主な交通として、町の南北を縦断するJR相模線がある。気候は温暖でかつては農業が主要産業であったが、1964年の町内田畑地区における工業団地の設置をはじめ、高度経済成長期に企業の工場の誘致が盛んにおこなわれたことにより、工業化と、農耕地の宅地化が急速に進んだ。



県内の方言区画上の位置としては、日野資純（1952、1964等）によると神奈川県南部方言の下位区分である「高座＝戸塚方言」に属す。この区画には旧相模原市域、座間市、大和市など旧高座郡の市町と、横浜市戸塚区の一部が含まれる。

3. 調査について

調査は平成29年9月～12月、寒川町内で行った。話者は寒川村（現：寒川町）小谷出身の老年層話者2名。

話者A 82歳男性。農業（兼業）。60歳まで寒川町および茅ヶ崎市内で勤務。

話者B 78歳男性。元会社員、および役場職員（寒川町）。

調査は名詞、動詞、形容詞について行った。名詞は単独の発音とその後を

含む短い文を作成してもらい発音してもらった。動詞と形容詞については、語単独の発音と、活用形⁽²⁾を含む文を作成してもらい、発音してもらった。調査対象とした語は平山輝男(1960)の類別語彙表収録の505語⁽³⁾を中心に、表外の1～3拍名詞および3～4拍形容詞、4拍以上の名詞や、複合動詞など362語を加えた867語。本稿では、話者Aの1～3拍名詞及び2・3拍動詞、形容詞の調査結果を中心に述べる。なお、アクセントおよび音声の示し方について、音韻論的解釈については/ /で囲み、下がり目は記号[◡]を用いた。音声の表記はIPA またはカタカナを用いた。カタカナ表記の際、高い拍はゴシック体、低い拍は明朝体で示した。また、ガ行鼻濁音は「カ° キ° ク° ケ° コ°」と半濁点を用い、無声化した拍はひらがなを用いて表した。

4. 調査結果

4. 1 アクセントの体系

明瞭な「東京式」アクセント。アクセントの下がり目の有無と位置が弁別的特徴であり、 n 拍の語に対して $n + 1$ 種の型の対立がある。

寒川町方言のアクセントの体系

拍	音韻論的解釈	語例
1	/○/	柄、蚊、毛、子、血…
	/○◡/	絵、尾、木、酢、田、手、荷…
2	/○○/	飴、蟻、烏賊、梅、釘、行く、着る…
	/○○◡/	石、歌、北、寺、足、鍵…
	/○◡○/	斧、秋、汗、婿、夜、会う、見る、良い…
3	/○○○/	欠伸、錨、鎖、衣、遊ぶ、借りる、甘い…
	/○○○◡/	小豆、力、頭、扇、鏡、刀…
	/○○◡○/	五つ、油、余る、起きる、黒い…
	/○◡○○/	嵐、岬、もみじ、帰る、通る…

4. 2 発音上の特徴

受け身、尊敬の「レル・ラレル」において、レ→イの訛音が観察された。

「トライル」よりも「トライタ」「トライチャッタ」など、完了の形式で主に現れる。語中・語末のガ行音は鼻音が観察された（考える[kan̥ge:ru] この次[kono tsuŋi]）。「行く」は[igu]と発音されることがある。[ikw]と無声子音になることはあるが、鼻音の[iŋw]となることはない。連母音については[take:]（高い）、[mu:ne:ta]（胸板）、[i:no:]（結納）など、融合、長音化が観察される。/wai/の ai 融合に伴い[we:]の音が観察される（沸いた[we:ta]、乾いた[kawe:ta]）。ただし、規則的ではなく、[w]は脱落もする。[je:]は観察されなかった（[e:ta]焼いた、[hae:]早い）。母音の無声化に伴う下がり目の移動はしばしば観察される（「吹く」ふク[ɸu.ku]、「来てくれ」きテクレヨー[ki.teːku:re.jo:]）が、規則的ではなく、無声化をしても下がり目の位置が保たれることもある。その他、[fi.tai]（額）、[fiʒiki]（ひじき）、[fi.kkakeru]（引っかける）、[fi.baʃi]（火箸）のように「ヒ」から「シ」への変化は規則的ではないが一部の語に観察される。逆の変化は本稿における調査項目からは観察されなかった。また、[fi.bo]（紐）、[ʃakaɪja]（左官屋）、[kumaze]（熊手）、[hoŋoreru]（解れる）、[jue:]（祝い）など、子音や母音の交替が一部の語に観察された。同様の特徴は話者 B にも観察された。

4. 3 名詞のアクセント

一拍名詞

下がり目のない平板型と下がり目のある頭高型の2つのアクセントの型がある。

平板型

語例 柄、蚊、毛、子、血、戸、実、身【第Ⅰ類】 名、葉、日、藻【第Ⅱ類】

頭高型

語例 帆、世【第Ⅰ類】 矢【第Ⅱ類】 絵、尾、木、酢、田、手、菜、荷、根、野、火、穂、芽、目、湯、夜、輪【第Ⅲ類】 《表外》巢

I・Ⅱ類が平板型、Ⅲ類に属する語が頭高型であるが、例外として、Ⅰ類の「帆」「世」、Ⅱ類の「矢」で頭高型のアクセントが観察された。「巢」も、

頭高型のアクセントに移行していた。なお、話者Bに、「テカ° タリネー（手が足りない）」「ニカ° オモイ（荷が重い）」など、一部の慣用表現で頭高型の語が平板に発音される例が観察された。

二拍名詞

平板型と、尾高型、頭高型の3つのアクセントの型がある。

平板型

語例 飴、蟻、烏賊、牛、梅、枝、海老、顔、柿、風、金、壁、雉、傷、桐、霧、釘、口、首、腰、酒、笹、皿、杉、鈴、裾、底、滝、竹、塵、爪、虎、鳥、庭、布、箱、鼻、羽、髭、膝、水、道【第Ⅰ類】
《表外》人

尾高型

語例 石、岩、歌、音、紙、川、北、旅、寺、梨、夏、橋、旗、肘、冬、町、胸、村、雪【第Ⅱ類】足、網、泡、家、池、犬、色、腕、馬、裏、鬼、鍵、髪、瓶、岸、草、櫛、靴、倉、栗、事、竿、坂、塩、炭、月、土、波、縄、糠、蚤、花、骨、山、綿【第Ⅲ類】《表外》熊、韭、[hamu]（海の意）

頭高型

語例 斧、神、雲【第Ⅲ類】跡、粟、息、糸、稲、今、白、海、瓜、奥、帯、笠、槽、数、肩、鎌、絹、錐、屑、空、種、箸、針、松、麦【第Ⅳ類】秋、汗、雨、鮎、桶、陰、蜘蛛、声、猿、露、鶴、春、鮎、窓、婿、夜【第Ⅴ類】《表外》[koba]（隅の意）

語の類で見ていくとⅠ類が平板型、Ⅱ・Ⅲ類が尾高型、Ⅳ・Ⅴ類が頭高型で、例外はⅢ類の「斧」、「神」、「雲」の3語であった。秋永一枝（1999）や稲垣滋子（1961）等東京および周辺域で古くは尾高型であったと指摘のある「神」、「雲」については、専ら頭高型のアクセントが観察された。

三拍名詞

平板型と、尾高型、中高型、頭高型の四つの型の対立がある。

平板型

語例 欠伸、筏、錨、田舎、鰯（尾高型も）⁽⁴⁾、飾り、霞、形、鰹、着

物、鎖、轡、車、煙、仔牛、氷、小山、衣、魚、姑、印、使い、机、隣、膠、寝言、初め、鼻血、庇、額、羊、南、昔、鎧【第Ⅰ類】間、桜、とかげ、扉、百足【第Ⅱ類】、黄金、二十歳【第Ⅲ類】鼬（尾高型も）、畑、林、東【第Ⅳ類】、簾、襷（尾高型も）【第Ⅴ類】兎、鰻、狐、雀、背中、鼠、裸、雲雀、誠、操、蚯蚓[mimizuu, memezuu]【第Ⅵ類】後ろ、鯨、薬、盥【第Ⅶ類】《表外》[abukuu]（泡）、苳、[okabo]（陸稻）、親父（尾高型、頭高型も）、南瓜、茸、くらげ

尾高型

語例 麓（Ⅰ類）小豆、毛抜き、釣瓶、二つ、二人、夕べ【第Ⅱ類】力【第Ⅲ類】頭、恨み、扇、男、面、女、鏡、仇、刀、拳、暦、宝、袴、鉢、光、響き、袋、仏【第Ⅳ類】椿【Ⅶ類】《表外》鱗、鱒子、豆腐、[genko]（拳）、[kokera]（鱗）

中高型

語例 小麦【第Ⅲ類】五つ、思い、境、筵（尾高型、平板型も）【第Ⅳ類】、油、心、柱【第Ⅴ類】《表外》[kamozi]（髪）、[tsu,tsu:zi]つつじ、土鍋、八重歯、[jue:]（祝い）、若芽

頭高型

語例 蟹、緑【第Ⅱ類】鮑、さざえ、岬【第Ⅲ類】嵐、瓦、紅葉、蕨【第Ⅳ類】朝日（中高型⁽⁵⁾も）命、鰈、胡瓜、石榴、姿、涙（中高型も）、錦、枕（中高型も）、まなこ【第Ⅴ類】鳥、高さ、狸【第Ⅵ類】蚕、兜、病【第Ⅶ類】《表外》青葉、南瓜、茸、しめじ、[mamija]（眉）、蜜柑

3拍名詞について、伝統的には尾高型や中高型だが、東京都心（秋永一枝1999など）及び周辺（稲垣滋子1961、馬瀬良雄1981、三井はるみ1996など）で、所属語の多い他の型への移行が指摘されており、坂本薫（2017,2）において県西部で同様の変化が生じていることが明らかになっている。まず、伝統的には尾高型であると言われているⅡ類の「小豆」、「毛抜き」、「釣瓶」、Ⅳ類の「鼬」、「拳」、「畑」、「林」、「東」について。県内のこれまでの調査から

尾高型のアクセントが予測されたが、結果を見ると、Ⅱ類の3語は尾高型が観察されたものの、Ⅳ類の語は安定的に尾高型が観察されたのは「拳」のみで、その他の語は平板型が観察された。なお、Ⅳ類の「筵」は複数の発話の中で中高型、尾高型、平板型と複数のアクセント型が観察された。話者の内省により中高型を優勢とした。

中高型については、Ⅲ類「小麦」や、Ⅴ類「油」、「心」、「柱」は伝統的なアクセントを保持していたが、「朝日」、「涙」、「枕」は、劣勢な型として中高型名残っているものの頭高型の方が優勢であった。「命」、「姿」等の語は例外なく頭高型のアクセントが観察された。また、「南瓜」、「茸」、「眉（まみや）」も、観察されたのは日野資純（1984）で、「神奈川県的」と述べられている中高型ではなく頭高型であった。

このほか、Ⅲ類の「二十歳（平板型）」やⅣ類の「瓦（頭高型）」、Ⅶ類の「椿（尾高型）」は、共通語アクセントとは異なるアクセントが観察された。

4. 4 動詞のアクセント

二拍動詞

平板型と起伏型の型の対立がある。語中・語末に連母音がある語には音声記号を付した。au,ou 連母音について、語単独発音では非融合だが、「ヨー」「ベー」等を後続させた形式では au は融合した[a:]が観察された。[ow]は連母音が保たれる傾向がある。

平板型

語例 行く、産む、売る、追う[ow]、置く、押す、貸す、刈る、聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、知る、吸う[sur:]、空く、添う[sow]、散る、突く、継ぐ、積む、釣る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、張る、引く、減る、巻く、増す、揉む、止む、遣る、言う[jur:]、割る【第Ⅰ類 A】着る、する（[firu]とも）、煮る、寝る【第Ⅰ類 B】《表外》買う[kɑ:]

頭高型

語例 会う[a:]、編む、打つ、書く、勝つ、噛む、切る、食う[kur:]、蹴

る、漕ぐ、刺す、住む、剃る、立つ、取る、縫う[nur:]、脱ぐ、練る、飲む、這う[haw]、吐く、吹く、降る、干す、掘る、蒔く、待つ、漏る、読む【第Ⅱ類 A】来る、出る、見る【第Ⅱ類 B】《表外》着く、付く、(縄を)なう[naw]

三拍動詞

平板型と起伏型（中高型・頭高型）の型の対立がある。

平板型

語例 上がる、遊ぶ、当たる、浮かぶ、歌う[utaw, uta:]、送る、飾る、変わる、嫌う[kiraw, kira:]、削る、探す、探る、沈む、慕う[ji̥tau, ji̥ta:]、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、ゆずる【第Ⅰ類 A】・明ける、植える、借りる、枯れる、消える[ke:ru]、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える【第Ⅰ類 B】違う[tʃiŋa:]【第Ⅱ類 A】

中高型

語例 余る、祈る、祝う[iwaw, iwa:]、動く、移る、恨む、起こす、落とす、思う[omo:]、乾く、崩す、砕く、曇る、縛る、叩く、頼む、作る、包む、詰まる、照らす、懐く、悩む、習う[naraw, nara:]、憎む、濁る、ひがむ、光る、許す、【第Ⅱ類 A】生きる、起きる、落ちる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、晴れる【第Ⅱ類 B】歩く、隠す【第Ⅲ類】

頭高型

帰る[ke:ru]【第Ⅱ類 A】入る[he:ru]【第Ⅲ類】《表外》返す[ke:su]、通る、参る[mairu, me:ru]

母音の無声化が生じる「吹く」、「付く」、「着く」等については、先述のように異音として、平板なアクセントも観察された。しかし、無声化しながらも、下がり目を保つ発音の方が優勢であった。「言う」は、[ju:]と発音され、「ユワネー」、「ユイテー」、「ユエ」のように活用形のアクセントにも反映される。

活用形のアクセント

表 1：寒川町老年層 動詞の活用形（2 拍）

後続形式の拍数	番号	語例 後続形式	売る（Ⅰ類）	書く（Ⅱ類）	寝る（Ⅰ類）	見る（Ⅱ類）
0	①	終止形	ウル	カク	ネル	ミル
	②	命令形	ウレ	カケ	ネロ	ミロ
1	③	タ	ウッタ	カイタ	ネタ	ミタ
	④	テ	ウツテ	カイテ	ネテ	ミテ
	⑤	ナ・禁止	ウルナ	カクナ	ネルナ・ネンナ	ミルナ・ミンナ
	⑥	バ・仮定	ウリヤー	カケバ・カキヤー	ネリヤ	ミリヤ
2	⑦	コト・事	ウルコト	カクコト	ネンコト	ミンコト
	⑧	レル・受身、尊敬	ウラレル・ウライル	カカレル・カカイル	ネラレル・ネライル	ミラレル・ミライル
	⑨	セル・使役	ウラセル	カカセル	（寝かせる）	（見せる）
	⑩	タイ・願望	ウリテー	カキテー	ネタイ	ミテー
	⑪	ナイ・打消	ウラネー	カカネー	ネネー・ネナイ	ミネー
	⑫	シ（二）行ク	ウリイク	カキイク	ネニイク	ミーイク
	⑬	準体助詞＋ガ	ウルノカ°	カクノカ°	ネルノカ°	ミルノカ°
	⑭	ベー・意思・勧誘	ウンベー	カクベー	ネベー	ミルベー・ミベー
	⑮	マス	ウリマス	カキマス	ネマス	ミマス
3	⑯	ソーダ・様態	ウリソーダ	カキソーダ	ネソーダ	ミソーダ
	⑰	ナガラ・付帯状況	ウリナカ°ラ	カキナカ°ラ	ネナカ°ラ	ミナカ°ラ
	⑱	ダロー・推量	ウルダロー	カクダロー	ネンダロー	ミンダロー
	⑲	トヨー・伝聞	ウルトヨー	カクトヨー	ネルトヨー	ミルトヨー
	⑳	ラシー・推量	ウルラシー	カクラシー	ネルラシー	ミルラシー
	㉑	ダベー・推量	ウルダベー	カクダベー	ネルダベー	ミルダベー
		タンベ・過去の				

	②②	推量	ウツタンベ	カイタンベ	ネタンベ	ミタンベ
4	②③	タ方ガ（良イ）	ウツタホー カ°・ウツ タホーカ°	カイタホー カ°	ネタホーカ°	ミタホーカ°
	②④	ナカッタ	ウラナカッ タ	カナナカッ タ	ネナカッタ	ミナカッタ
	②⑤	ダンベー・推量	ウルダン ベー	カクダン ベー	ネルダン ベー	ミルダン ベー

2拍の動詞を見ると、①終止形から④「テ」が接続する形式まで、Ⅰ類の語とⅡ類の語のアクセントの対立は保たれている。⑤の「ネンナ」は、ラ行音の撥音化によって下がり目が1拍移動している。

平板型の動詞に⑦「事」、⑧「レル・ラレル」、⑨「セル」、⑩「タイ」、⑪「ナイ」が接続した形式は平板型のアクセントが保たれていた。ただし、⑪「ネネー」のように連母音が融合した形式は下がり目が生じるアクセントが優勢であった。ただし、「ネネーナ」のように「ナ」や「ヨ」が後続する場合は下降を生じない。

⑫平板型の動詞連用形+ニ行ク（来ル）の形式は、動詞の末尾に下がり目が来る。なお、助詞「ニ」が脱落した方がより自然という意識がある。なお、「吸う」、「歌う」など、母音連続を含む動詞の場合は「スイ イク」、「ウタイイク」と下がり目の位置が移動する。

⑬の準体助詞の「ノ」は、平板型の動詞には高いままつく。また、自然談話の中で「カーノカヨー（買うのか）」と終助詞「ノ」が高く続くアクセントも観察された。

⑭意志・勧誘の意味で用いる「ペー」は平板型、起伏型を問わず「ペー」の下がり目が生かされる。一段動詞では「ネルペー」「ミルペー」のように終止形にそのままつく語形とともに、「ネペー」、「ミペー」のように動詞の語尾が脱落する語形も観察された。

⑮推量「ダロー」は、平板型の動詞に接続する場合は「ダロー」の下がり目が生かされ、起伏型の動詞に接続する場合は動詞の下がり目が生かされるという伝統的なアクセントが観察された。

⑩伝聞は、「ト」のアクセントを聞いた。伝聞の「ト」は、平板型の動詞には高くそのままつき、起伏型の動詞は動詞の下がり目が生かされる。必ず「ヨー」が接続するので、「トヨー」で一つの後続形式とした。アクセントは⑮の「ダロー」と同様の平板型は中三高型、起伏型は頭高型であった。

⑪名詞「方」を「～した方が良い」の文脈で使用する形式で、平板型の動詞に接続する際、「タ」の後に下がり目が来るアクセントが観察された。

⑫推量の意味で用いられる「ダベー」は平板型の動詞に接続する場合は動詞末尾に下がり目を生じ、起伏型の動詞に接続する場合は、動詞の下がり目が生かされ、そのまま低くつく。

⑬「～ただろう」の意味で「～タンベ」という形式が用いられる。「タダンベ」が短縮された語系と考えられる。アクセントの下がり目は、起伏型は前接の動詞を生かし、平板型に接続する場合は「タ」の後で下がる。

⑭「ダンベー」も、推量の意味で用いられる。話者の意識として⑫の「ダベー」と意味の違いは無いということであったが、話者の内省によると使用頻度は「ダンベー」の方を頻繁に用いるという。アクセントの下がり目は、起伏型は前接の動詞を活かし、平板型に接続する場合は「ダンベー」の下がり目が生かされる。

表2：寒川町方言老年層 動詞の活用形（3拍）

後続形式の拍数	番号	語例 後続形式	遊ぶ（Ⅰ類）	入る（Ⅲ類）	選ぶ（Ⅱ類）	帰る（Ⅱ類）
0	①	終止形	アソブ	ヘール	エラブ	ケール
	②	命令形	アソベ	ヘーレ・ヘーロ	エラベ	ケーレ
1	③	タ	アソンダ	ヘー ッ タ・ヘー ッ タ	エランダ	ケー ッ タ
	④	テ	アソンデ	ヘー ッ テ・ヘー ッ テ	エランデ	ケー ッ テ
	⑤	ナ・禁止	アソブナ	ヘーンナ	エラブナ	ケーンナ
	⑥	バ・仮定	アソビャー	ヘーリャ	エラビャー	ケーリャ
	⑦	コト・事	アソブコト	ヘーンコト	エラブコト	ケーンコト

2	⑧	レル・受身、尊敬	アソバレル・アソバイル	ヘーラレル・ヘーライル	エラバレル・エラバイル	ケーラレル・ケーライル
	⑨	セル・使役	アソバセル	ヘーラセル	エラバセル	ケーラセル
	⑩	タイ・願望	アソピテー	ヘーリテー	エラピテー	ケーリテー
	⑪	ナイ・打消	アソバネー	ヘーラネー・ヘーラネー	エラバネー	ケーラナイ・ケーラネー
	⑫	シ（二）行ク	アソビイク・アソビイク	ハイリイク	エラビイク	（使わない）
	⑬	準体助詞＋ガ	アソブノカ°	ヘーンノカ°	エラブノカ°	ケーノカ°
	⑭	ベー・意思・勧誘	アソブベー	ヘーンベー	エラブベー	ケーラベー・ケンベー
	⑮	マス	アソビマス	ハイリマス	エラビマス	カエリマス
3	⑯	ソーダ・様態	アソビソーダ	ハイリソーダ	エラビソーダ	ケーリソーダ
	⑰	ナガラ・付帯状況	アソビナカ°ラ・アソビナカ°ラ	ヘーリナカ°ラ・ヘーリナカ°ラ	エラビナカ°ラ	ケーリナカ°ラ
	⑱	ダロー・推量	アソブダロー	ヘーンダロー	エラブダロー	ケーラダロー
	⑲	トヨー・伝聞	アソブトヨー	ヘールトヨー・ヘールトヨー	エラブトヨー	ケーントヨー
	⑳	ラシー・推量	アソブラシー	ヘールラシー	エラブラシー	ケーララシー
	㉑	ダベー・推量	アソブダベー	ヘーンダベー	エラブダベー	ケーンダベー
	㉒	タンベ・過去の推量	アソندانベ	ハイッタンベ	エランタンベ	ケッタンベ
4	㉓	タ方ガ（良イ）	アソندانホーカ°	ヘーッタンホーカ°	エランタンホーカ°	ケッタンホーカ°
	㉔	ナカッタ	アソバナカッタ	ヘーンナカッタ	エラバナカッタ	ケーンナカッタ
	㉕	ダンベー・推量	アソブダンベー	ヘーンダンベー	エラブダンベー	ケーンダンベー・カエルダンベー

3拍の動詞は、平板型「遊ぶ」、起伏型「選ぶ」「帰る」に加え、Ⅲ類の動詞「入る」を表に加えた。「入る」は終止形単独では頭高型であったが、活用形の諸形式のアクセントを見ると、平板型の動詞アクセントが共通する点が観察された。例えば、②命令形は、頭高型の「ヘーレ」が優勢だったが、一段動詞との混同と考えられる語形「ヘーロ」では平板型が観察された。同様に④の「テ」、⑤の「タ」、⑪の「ナイ」、⑰「ナガラ」、⑲「トヨー」が接続した形式も、平板型の動詞、頭高型の動詞両様のアクセントが観察された。また、⑤「ヘーナ」や⑱「ヘーンドロー」のように、もっぱら頭高型が観察された形式もあったが、反面、⑬「ヘーノガ」、⑳「ハイッタンベ」、㉑「ヘーナカッタ」のように平板型動詞的なアクセントのみ観察された形式もあった。「入る」のアクセントは、平板型動詞と頭高型動詞のアクセントが混在している。また、連母音の融合も規則的でなく、融合形のみ観察された形式、融合形・非融合形が併用される形式、非融合のみが使用される形式に分かれた。

続いて、平板型の動詞活用形のアクセントを中心に、「入る」以外の活用形のアクセントの特徴について述べる。

⑦「事」や⑨「セル」⑯「ソーダ」は拍数が増えても平板型が保たれていたが、⑩「タイ」、⑪「ナイ」は末尾の連母音が融合するとともに下がり目が生じている。

⑫の「(ニ) 行ク」は平板型と中二高型の2つの型を載せた。2拍のこの形式は、下がり目は動詞末尾で安定していたが、3拍の五段動詞は共通語的な平板型と、下がり目のある型の両方が観察された。3拍の一段動詞については「カリニク（借りに行く）」、「ステニクル（捨てに来る）」と規則的に下がり目のあるアクセントが観察された。

⑱「ダロー」、⑲「トヨー」、㉑「ラシー」はいずれも後続形式の下がり目が生かされるアクセントが観察された。⑱「ダロー」、⑲「トヨー」は起伏型の動詞とアクセントの対立が見られたが、㉑の「ラシー」は平板型も起伏型も「ラシー」の下がり目が生かされるアクセントであった。

㉓「タ方ガ」は、2拍動詞と同じく平板型の動詞につく場合、「タ（ダ）」

の後に下がり目のあるアクセントが観察された。

「ベー」、「ダンベ」に関する形式について、勧誘の⑭「ベー」、推量の「ダンベ」、「タンベ」は、2拍の動詞と同様のアクセントが観察されたが、「ダンベー」は異なる特徴が見られた。2拍動詞に「ダンベー」が付く場合、平板型の動詞と起伏型の動詞とでアクセントの型が異なっていたが、頭高型の「帰る」に「ダンベー」が接続した形式で、頭高型とともに「ケーndanベー」と、平板型動詞と同じアクセントが観察された。

このほか、表では省いたが自然談話の中では「インジャン」（居るではないか）のように平板型の動詞に「ジャン」や「ジャー」が高く平らに後続するアクセントが観察されたが、調査では「ウルジャン/ウルジャー」と動詞末尾に下がり目の有るアクセントのみ観察された。

4. 5 形容詞のアクセント

二拍形容詞

2拍の形容詞のアクセントは全て頭高型である。老年層話者の場合、単独の語末は母音連続が融合するのがふつうである。「濃い」はコイーと3拍で、「酸い」はすっパイと4拍の語が用いられる。

語例 無い、良い（ヨイ・イー）

三拍形容詞

I 類の形容詞に、平板型と起伏型の両方の型が観察された。起伏型への統合が生じており、明確な対立が失われつつある。連母音の融合は/ai,oi,ui/すべてで観察された。連母音の融合の関連について、「遠い」は、非融合形では平板型の「トーイ」、連母音が融合した語形「トエー」は起伏型のアクセントで発音される。その他の語については、規則性は見られなかった。なお、「多い」「遠い」の融合形に[towe:]のような[w]の挿入は認められなかった。

平板型

赤い（起伏型も）、浅い、甘い（起伏型も）荒い、薄い、遅い（起伏型も）、重い、軽い（起伏型も）、暗い（起伏型も）【第I類】

起伏型

厚い、固い、遠い（トエー）【第Ⅰ類】熱い、多い（オエー）、黒い、
白い、高い、近い、強い、長い、早い、低い、深い、古い、弱い【第
Ⅱ類】

形容詞の活用形のアクセント

表3：寒川町方言老年層 形容詞の活用形（3拍）

後続形式の拍数	番号	語例 後続形式	甘い（Ⅰ類）	長い（Ⅱ類）
0	①	終止形	アメー・アメー	ナケ°ー
1	②	ヨ	アメーヨ	ナケ°ーヨ
	③	カ・疑問	アメーカ	ナケ°ーカ
	④	ダ・断定	アメーダ	ナケ°ーダ
	⑤	テ	アマくテ	ナカ°クテ・ナカ°クテ
	⑥	タ	アマカッタ	ナカ°カッタ・ナカ°カッタ
	⑦	キャ・反語	アマキャ	ナカ°キャ
	⑧	バ・仮定	アマケレバ・アマケレバ	ナカ°ケレバ・ナカ°ケレバ
2	⑨	デス	アマイデス	ナカ°イデス
	⑩	ジャン・反語	アメージャー	ナカ°イジャー
	⑪	ノカ°・準体助詞＋カ°	アメーノカ°	ナカ°イノカ°
	⑫	ツテ	アマくツテ	ナカ°クツテ・ナカ°クツテ
	⑬	ネー・打消	アマクネー	ナカ°クナイ・ナカ°クナイ
	⑭	ナル	アマクナル	ナカ°クナル・ナカ°クナル
	⑮	ペー・推量	アマカンペー	ナカ°カンペー
3	⑯	ソーダ・様態	アマソーダ	ナカ°ソーダ
	⑰	トヨー・伝聞	アメートヨー	ナケ°ートヨー
	⑱	ラシー・推量	アマイラシー	ナカ°イラシー
			アメーダンベ・アメーダン	

	⑭	ダンベ・推量	ベ	ナケ [°] ーダンベ
4	⑯	アンメー・否定 の推量	アマクアンメー	ナカ [°] クアンメー

①の終止形単独の発音や③の「カ」や④の「ダ」、⑩の「ジャー」が接続する場合、Ⅰ類の形容詞に下がり目が生じ、Ⅱ類の形容詞と区別なくなる。②のように助詞「ヨ」や「ナ」が接続した形式は多くの場合平板型のアクセントが観察される。⑩の「ソーダ」も平板型と起伏型の対立がみられた。

平板型の形容詞で⑥「カッタ」が接続した形式は中一高型のみであったが、⑧の「ケレバ」が接続した形式には、より古いと言われている中二高型も観察された。

⑭の伝聞の表現は、動詞と同じく「トヨー」が用いられる。アクセントも、動詞同様、前節する語によって変わり、平板型の形容詞に続くときは「トヨー」の下がり目が生かされ、起伏型の形容詞に続くときは、形容詞の下がり目が生かされたアクセントが観察された。

⑭の「ダンベ」が接続した形式は平板型・起伏型に共通する中一高型のほかに、平板型の形容詞で、後続する「ダンベ」に下がり目のあるアクセントが観察された。

Ⅱ類の形容詞は、⑤の「テ」、⑥の「カッタ」、⑧の「ケレバ」、⑬「クナイ」などの形式で頭高型と中一高型の2つのアクセントが観察された。⑦の「キャ」や⑯の「アンメー」のように頭高型のみ観察された形式があるほか、両方の型が観察された場合でもおおむね頭高型の方が優勢であった。

おわりに（まとめと展望）

ここまで、寒川町方言の老年層のアクセントの特徴について述べたことをまとめる。寒川町方言のアクセントは下がり目の有無と位置が弁別の特徴である「東京式」アクセントである。名詞については主に類別語彙に収められた語から、劣勢なアクセント型である3拍の尾高型と中高型の保持について特に述べた。伝統的なアクセントが保たれていることが予想されたが、実態としては優勢な型への合流が進んでいた。形容詞も、型の統合やⅡ類の形容

詞の活用形など、変化の傾向が目立つ。一方の動詞については、まず、「入る」の活用形のアクセントには平板型の動詞に通じるアクセントが一部残るという特徴が認められた。これは県内の方言区画上、東に隣接する三浦市方言(坂本薫、2017,9)でより顕著に見られた特徴である。東京都多摩地域(小林滋子1961)や、埼玉県西部(大橋勝男2008)等「西関東方言」地域でも同様の報告があり、「西関東方言」という一段階大きな視点で方言を見たときのひとつの手掛かりになる。その他活用形のアクセントにもこれまでに行った方言調査(坂本薫2014・2017,2)と共通する方言的特徴が観察された。また、「ペー」「ダンベ」に関する形式はこれまでの研究(坂本薫2014・2017a・2017b)で観察されなかった形式が観察された。これまで調査を行った地点でも本調査で得た新たな形式の発音について調査する必要がある。

課題点は調査の拡充である。同町内で他の地点(寒川町は11カ村が合併して町制施行した歴史がある)の実態を調査すること、また、旧高座郡の他の市町で調査を行うことにより、「高座＝戸塚方言」のアクセントのより詳細な姿を明らかにしたいと考えている。

謝辞

話者の紹介については寒川町教育委員会、寒川文書館のご協力を賜った。ここに記し感謝申し上げます。

参考文献

- 秋永一枝(1999)『東京弁アクセントの変容』笠間書院
- 秋永一枝(2010)「アクセント習得法則」金田一春彦・監『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』三省堂
- 神奈川県立博物館・編(1979)『神奈川県言語地図』神奈川県立博物館
- 金田一春彦(1942)「関東地方に於けるアクセントの分布」『日本語のアクセント』中央公論社
- 小林滋子(1961)「三多摩方言アクセントの推移」『国語学』46集
- 坂本薫(2014)「小田原市方言アクセントの古相について」『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書―首都圏言語研究の視野―』三井はるみ編 国立国語研究所共

同研究報告

- 坂本薫 (2017a) 「神奈川県中郡二宮町方言のアクセントーアクセントの体系と名詞・動詞・形容詞のアクセントー」『國學院大學大学院紀要』
- 坂本薫 (2017b) 「神奈川県三浦市方言における老年層話者のアクセントについて」日本音声学会第31回全国大会予稿
- 寒川町史編集委員会編 (1995) 「ことばの葉」寒川町史調査報告書 5 寒川町
- 善理信昭 (1996) 「寒川町と大和市の方言の差異について」平山輝男博士米寿記念会・編『日本語研究諸領域の視点』上巻 明治書院
- 日野資純 (1952) 「相模方言の素描 (その方言区画)」『国語学』 9 集 武蔵野書院
- 日野資純 (1964) 「神奈川県の方言区画」『日本の方言区画』日本方言研究会編 東京堂
- 日野資純 (1984) 「アクセント研究に対する一つの提言 (アクセント類別語彙未登載語のアクセントと方言研究)」『音声学会会報』日本音声学会
- 平山輝男 (1957) 「東京都西多摩郡奥多摩町小河内方言の調査」『日本語音調の研究』 pp.118 明治書院
- 平山輝男・編 (1960) 『全国アクセント辞典』東京堂
- 平山輝男 (1968) 『国語の音声』岩崎書店
- 馬瀬良雄 (1981) 「言語形成に及ぼすテレビおよび歳の言語の影響」『国語学』 125 集
- 三井はるみ (1996) 「大都市と周辺地域の方言」『方言の現在』小林隆ほか編 明治書院

注

- (1) 地図は、『神奈川県言語地図』より引用。筆者が加工を加えた。
- (2) 動詞は22種、形容詞は19種の活用例を示し、それらについて普段の言い方に直してもらった。
- (3) 1～3 拍名詞301語、2～4 拍動詞170語、2～4 拍形容詞35語。
- (4) 複数のアクセントが観察された場合、最も優勢であると考えられる (最も自然な発音はどれですかと質問した結果) アクセント型を示し、それ以外の方については (～も) として示した。
- (5) 町内に「旭 (あさひ)」という地名があり、地名は中高型が優勢、陽光の「朝日」は頭高型が優勢と使い分けとも見られる傾向が観察された。